「季刊ピープルズ・プラン」NO・69（二〇一五年七月）

私・たちの七転八闘行

――「日本の構成的解体」の想像力の自立を求めて――（＊1）

生・労働・運動ネット

「イメージから先に変われ」――私・たちは、この三十五年余り、「日本の構成的解体」（「日本」によって構成されている自らの「自己解体」＝「日本」の構成（Constitution／construction）の解体）を企てる想像力の自立を求めて、七転八闘してきた。以下はその道行きの素描である。

1．私・たちの来歴――

「背後の未来―〈68〉」に背中を押されて

私・たちの運動は、「〈68〉年――残された者、私・私としては……」という呟きを重ね合わすことから始まった。七十年代末の白々とした大学キャンパスで〈68〉年のその後を踏み分けあぐねる者・生き＝行きあぐねている者であった私・たちは、キャンパスを見限り、可能な限り暮らしを重ね合わせ、仲間内に「創造的失業者」を生みだしながら、「個別課題運動体」でもなく、「政治党派」でもない「社会運動態」を創り出すことへ踏み出そうとする。

その過程で、私・たちは、折からの北陸電力の能登での原発建設の策動に圧されて当時の「富山県労協」が「原発反対」の方針を取り下げたことに対する対抗行動を皮切りに、街頭に立ち始めた。「反原発市民の会」が一九八〇年にスタートする。それはやがて、原発を招き寄せている富山という「地域」を問うことへ向かい、同時期に列島各地で「地域」のありようを問うことからさらに創り変えることを志向・試行しようとする人々へ花崎皋平さんが呼びかけた〈地域を拓くシンポジウム〉（＊2）に参加することへとつながっていく。

八十年代に入り、能登（志賀）原発建設をめぐる策動は、水面下での住民分断工作として進行する。私・たちは立地予定現地での「反対看板」取り付け行動を通じて、現地でねばり強く闘う住民、「地域住民運動」（＊3）を担う人々と出会う。なかでも、予定地からわ

----------切り取り----------

ずか八百メートルに住まう橋菊太郎・たきさんの、半ば「村八分」のような目に遭いながらも「いつか光がみえるわと想うて」と反対し続ける強い生の在りように、どう応えるのかが問われていると感ずるようになる。

なりふりかまわぬ北電・石川県の介入で、反対運動の最大拠点「西海漁協」が崩され、水面下にあった闘いの攻防線が一挙に浮上すると、周辺地としての能登――電力消費地（北電本社所在地）としての富山という、「能登〈と〉富山」の関係があらためてクローズアップされる。私・たちは何者として、能登の人々と向き合うのか――この問いが輪郭を際立たせてくる。

八十九年着工に向け、攻防は大きな山場を迎える。その反対の盛り上がりと八十六年の「チェルノブイリ原発事故」以後新たに運動圏に登場してくる人々の動きが重なる。「いずこも現地」とその人々はアクションする。私・たちは、その身振りにとまどいながらも、そのとまどいを反／脱原発運動のなかに閉じてしまうのではなく、社会運動の連合という広い文脈のなかで共に解いていく方向を模索する。（＊4）

反原発運動のその後に限って経過を振り返れば、残念ながら着工――稼働を阻止できなかったが、少なくとも三号機以上の建設を許さず、私・たちの共有地を迂回したきわめて歪な敷地内へと原発建設地を押し込め、第一次訴訟では全国で初めて「稼働差し止め」の判決を勝ち取ることができた。また、その過程では能登の突端に位置する珠洲での北電・中電・関電の原発立地の策動を、地元住民の闘いに加勢して阻止することもできた。その後、近接地域を中心に石川・富山にまたがる「命のネットワーク」としての行動を持続して現在にいたる。（＊5）

能登現地の人々と何者として向き合うのか――この問いを抱えて、私・たちは上で触れた〈地域シンポ〉に関わりながら、遠く「灰とダイヤモンド」の国から聞こえて来る声に心ひかれ、「遊学塾」という営みを始める。それは、当時ある書評紙に連載中だった小倉利丸さんの「支配の〝経済学〟」（＊6）を仲立ちにして、県内の「左翼分裂少数派組合」（＊7）、日教組から分裂し少数派組合を後に作る学校労働者のグループ（＊8）らと共に学び会い、行き合う試みであった。――それらの少数派組合の営みへの参加・〈地域シンポ〉の富山での開催・能登現地への往来・組合の地域政治への介入への加担などを通じて、私・たちは〈社会的自治〉のあり方を模索する（＊9）ようになる。

そうした営み、さらには、〈地域シンポ〉を通じてふれあったグループ（＊10）、〈ピープルズ・プラン21世紀〉という武藤一羊さんを中心とする壮大な企てへの参加（＊11）を通じてふれあったグループ（＊12）のもとへの「遊学」という経験にたって、私・たちはようやく「（対抗）社会運動態」としての輪郭を持ち始める。――反原発運動・里山での小さな農場の営み・学

校へ行かない／行けない子どもたちと関わる「自由教室」・資本主義を見限る視点を持ち、もう一度学び直しをする「自由学校」などに、壮・青、男・女入り交じって取り組み、淡いものではあるが「社会自治態」とでもいうべきベクトルを持ち始める。

「能登の海に冥れ」――そのベクトルの延長線上で地域政治への介入に踏み出した矢先、私・たちはそれらの営みを先頭に立って進めてきた者の死を迎える。能登の人々にどのように向き合うのかという問いを抱えて歩く途上で倒れる無念――せめて能登・赤住の橋さん夫妻の足下の、能登原発を見据える沖合の海に散骨してほしいという彼女の遺志に基づいて、私・たちは「海送り」を行った。

路上会合：沖縄の〈声〉と呼びかけあうことを
「日本の構成的解体」の始まりに！2010・5・31

「社会運動の社会運動」とでもいうべき社会運動の合力によって、原発を必要としない社会の構成へ向かうという〈夢〉は、途絶えることなく私・たちの内にある。

2. 私・たちの〈後〉3・11／12
――「日本の構成的解体」の方へ

●3・11／12が出来する。そのとき、私・たちは「沖縄セミナー」という企画の準備をしていた。直ちに私・たちにやってきたのは、沖縄―福島―私・たちと連なる〈声の蜂起〉――ながい沖縄の「国内植民地」の屈辱の果てからの〈声〉、ながい「中央」への隷属のなかからの福島の〈声〉、そして、私・たちの声が連鎖する〈声の蜂起〉を！という念いだった。その念い――「日本の構成的解体を！」という念いにたって、私・たちは、3・11／12〈後〉、七転八闘を続ける。

二〇一一年の夏から秋、私・たちは、3・11／12を経てなお志賀原発の再稼働に執着する北電に追随し、3・11／12を他人事と決め込み続ける原発周辺及び富山県内の「地方自治体」に対して、「地域自治体」として「反原発都市」・「避難都市」になる路を歩むこと

を求める「越境する参加民主主義」の試行を進める。その試行からさらに「反原発―列島右往左往行」を始める。

その進行のなかで、私・たちは「原発いらない福島の女たち」と行き会う。不可視の〈フクシマ解放機構〉――福島の闘いと列島各地の反／脱原発の諸営為・運動を二つの焦点とする楕円の上に立って、日本国家に内接する核発電システムをこの列島から引き抜く営みを累積する運動態――からの〈使者〉として、彼女たちは列島各地を、さらには海のむこうへと縦横無尽に駆け巡る。私・たちの内には、彼女たちと列島各地からのそこへの〈使者〉が横議・横行・横結するというイメージが住まい始める。

そのイメージは、この列島上の多様なイシューをめぐる横議・横行・横結のイメージを呼び寄せ、さらには「日本列島解体機構」とでもいうべきもののイメージを呼び込む。（＊13）

二〇一一年五月からスタートした「沖縄セミナー―二〇一一――沖縄〈と〉私・たち」を通して、私・たちは、仲里効さんと故・川音勉さんがその軌跡をくっきりと描き出した〈沖縄自立の動線〉から大きなインパクトを受け取る。（＊14）それは、私・たちに、「沖縄〈と〉私・たち」の〈と〉をどのように運動させるのかを問うている。〈と〉の〈動線〉――それは、戦後六十余年にわたるアメリカの覇権システムへの自発的隷従から脱しようとする鳩山政権のかすかな身動きの蹉跌をはるかにこえて、長年にわたる〈拒否〉の累積からなる匕首として、隷従からの脱却を迫って日本国家の喉もとに突きつけられている。同時にアジアの海へ自らを開き、アジアと共に生きる（＊15）未来を拓く櫓でもあるその匕首が、日本国家を構成し同時に日本国家によって構成されてもいる私たちに向けられていることは、言うまでもない。

それから四年、（＊16）敗戦／戦後七十年の今年、私・たちは「敗戦／戦後七十年と私・たち」という問いを、改めて「沖縄〈と〉私・たち――応援の〈と〉から応答の〈と〉へ」という問いとして立てることを企画している。それは、「取り返しのつかないことをいかに取り返すのか」という私たちの積年の念いの正念場に、自らを立たせることである。

それは、まずなによりも「私たちの21世紀の安保闘

国際反戦デー2011 富山県民集会　2011・10・21

争」の、さらには沖縄と共にアジアの海を生きることへ向かう「日本の構成的解体」の構想、そのための想像力の自立をはかることから始められなければならない。――第一に、そこに踏み込むに当たって、ここで詳細に触れる余裕はないが、最初に踏まえるべきなのは、かって一九三〇年代から四十年代始めにかけて企てられ、挫折した構想、第一次世界大戦以後変容する世界秩序に、とりわけ激動する中国との関係の組み替え／中国との連帯とそれをバネとする日本の構成的再編を通じて介入し、「協同」するアジアとして欧米諸国と対抗しようと企てられた、いわゆる「東亜協同体」の構想とその挫折を否定的に媒介することが、必要だろう。（＊17）最大の「他者」としての中国・アジアとどう向き合うのかは、「日本の構成的解体」を追及するうえで、避けられない問題であるのだから。また、それから三十年余り後に、その歴史的経緯を踏まえ、それを「東亜革命論」としてとらえて、「沖縄返還」をめぐる応接として表現された営み――「国境・国家・第三次琉球処分」（一九七一）をはじめとする川田洋さんの営みを参照しなければならないだろう。それは、以下に触れる「沖縄シンポ」の営みに継承されてもいる。第二に、少なくとも一九九五年から十年余りの後に企てられた沖縄の「自己決定権」をめぐる応接とその継続である「沖縄シンポ」の営みが沖縄にもたらしているものを、改めて私・たちのもとへ持ち返る＝還流させること、そして、私・たちの手で持ち変える＝反転させることが、不可欠である。（＊18）第三に、それは、一個二重の、一方で日本国家に敷設されてきた脱植民地化回避システムの解体、他方でアメリカへの自発的隷従システムからの離脱、すなわち「日米軍事同盟」の解消とアジアの「民衆の安全保障」システムの創出の構想でなければならない。（＊19）

沖縄〈と〉私・たち――その〈と〉が応答の〈と〉として運動するとき、言い換えれば、「私たちの安保闘争」が「日本（の構成的）解体闘争」の地平を拓くとき、私・たちは初めて沖縄に対する「応答責任」を果たす路を歩いていることになるのだろう。

……こうして、能登原発現地の人々とどのように向き合うのかという問いから始まった私・たちの七転八闘

羽咋市庁前座り込み　2012・9・3

の遍歴は、「能登〈と〉富山」――「沖縄〈と〉私・たち」というようにその問いを連続させたまま現在なおその途上にあり、私・たちがその自立を求めてきた「日本解体」の構成的想像力は、未だ試練の端緒にある。「いつか光がみえるわと想うて」と私・たちを促してくれた人々は、この三十五年余りの時のなかで、ひとり、またひとりと幽明境を異にしている。私・たちは遠くまで行くことができるだろうか……

再稼働阻止全国ネット　羽咋合宿　2013・4・14

「イメージから先に変われ」――この列島の社会運動圏では、「構成的想像力」の自立が尊重される土壌は決して豊かとは言えない。しかし、半世紀余りも前に、先のフレーズで社会運動圏を挑発した人もいれば、三十年余り前に「琉球共和社会憲法草案」なるものを無限遠点に向けて投げ上げるかのように提起し、運動圏を震撼させた人（*20）もいるし、四半世紀余り前に「ピープルズ・プラン21世紀」なる企てで、運動圏を叱咤した人もいる。

むろん、私・たちはそれらの人たちの末裔を気取りたいわけではない。私・たちはそれらの先達に学びながら、ただ前線の戦士の身体が宿す／身体に宿る〈未だない世界〉への夢や希望が、構成的解体の想像力により転生することに心惹かれているだけである。

よくもわるくもではなく、わるくもわるくも曾・祖父由来の「帝国継承という構成された想像力」に基づいて、いま「非対称の政治」を展開しているのは、眼前の敵。七十年の「戦後」の時間のなかで私・たちが抱えてきた満身創痍の「構成された想像力」（＝「日本国憲法」）を反転することなしに、私・たちがそれに対抗できるだろうか……

最後になるが、生・労働・運動ネットのメンバーが他の人びとと共に語らって、以下のことを進めていることをつけ加えておきたい。

この六月に入って、〈25時行動委員会〉――日々の用を果たした24時間後の25時間目に、この列島の未来を引き寄せる構想を〈運動〉させることを試みる者の

集まり――（＊21）をスタートさせ、自らの構想力に鑢をかけることへむけて、その第一回として、六月一四日にトークセッション：「六〇年安保闘争から五五年――21世紀の安保闘争の方へ」を企てる。また、それと併行して規定される「戦後70年訴訟」に抗して、「敗戦70年：私・たちの告知―この列島を宰領する国家への」を、日本国政府・中華人民共和主義国駐日日本大使館・大韓民国駐日日本大使館、台北駐日経済文化代表処に送付する。――〈補註ⅰ〉参照。

さらに、列島各地、とりわけ「国会前で展開されている「安保法案」反対運動の最大の「波」となることが予想される8月30日には、「映像／トークセッション『ピープル』が生まれる・・・??」を企てる。――〈補註ⅱ〉参照。また、9月17日には、国会前集会に参加する。　その参加報告およびその時点での反対闘争に関わるメンバーの所感については――〈補註ⅲ〉参照。また、その半年後の私・たちの『安保法案反対闘争』についての見解については、――〈補註ⅳ〉参照。

その後、本年に入ってからの安倍政治の策動による「慰安婦問題解決日韓合意」に対して、緊急集会をもつ。――〈補註ⅴ〉参照。

----------切り取り----------

〈補註ー〉

● 25時行動委員会：企画・2ー「アンケート」のお願い

25時行動委員会では、「戦後70年安倍談話に抗う－列島住民からのアピールは可能か」という企画を、8月に向けて用意しています。その準備を進めるうえで、一緒に考えていただければと思います。次のことにお応えください。

1. 敗戦／戦後の70年間でなされた、日本国家の「植民地支配・侵略戦争・その戦後処理」についての「反省」の内、あなたが最もこころひかれたものを、あげてください。
2. 敗戦／戦後70年のいま、あなたが創り出すべきだと考える「反省」のスタイルは、どのようなものでしょうか？
3. あなたは、いま「（日本）列島住民」を主語とする「反省」のスタイルの可能性を、どのようにお考えでしょうか？
4. 私・たちは、未生の「列島住民社会憲法」の「前文」へ向けて、〈前註〉をつけることを試みたいと考えていますが、その試みに参加していただけませんか？

なお、この企画の趣旨などは、以下をご参照ください。

25時行動委員会　E-mail:25h.action@gmail.com

● 25時行動委員会：企画・2 ー 資料

+. 丸川哲史＋成田龍一「東アジア共同体を作る」（「週刊読書人」2015・4・10）
+. 安倍首相「建国記念の日」メッセージ　2015・2・10
「バンドン会議60周年」スピーチ　2015・4・22
「米国議会」演説　2015・4・29
+. 「8・6ヒロシマ平和の集い2015―検証：被曝・敗戦70年－日米戦争責任と安倍談話を問う」
+. 米国の学者8人、「私なら70年談話をこう語る」（「週刊ダイヤモンド」2015・5・15）
+. 「根本から変えよう！」（樹花舎　2011）
+. 「憲法の論じ方を変え、改憲論を斬る」（「ピープルズ・プラン」2001・4）

● 25時行動委員会：企画・2 ー 趣旨

----------切り取り----------

　敗戦70年、私たちは、この列島の未来にかかわる歴史の大きな分岐点－この列島の未来を、自分自身の手で創りだすのか、「（大日本）帝国」の幻想にとりつかれた者の手にゆだねるのかという分岐点に、立っています。私・たちは、その幻想にとりつかれた者と無理心中するわけにはいかない、いわんや、この列島の未来をゆだねるわけにいきません。

　敗戦70年、この列島の未来を自分自身の手で創りだそうとするのであるならば、私・たちは先ず何よりも、私たちの、日本国家の「植民地支配」・「侵略戦争」についてのこれまでの「反省」の「反省」にたって、これまでとはまったく異なる「反省」のスタイルを創り出すことができるかという〈問い〉－ダレガソノ〈問イ〉ヲ私タチニ投ゲカケテイルノカ！！－の前に、自分自身を立たせなければならないのではないか、と思います。－なお、「反省」とは、「反省－究明－謝罪－補償」という一続きのプロセスを意味しています。

　敗戦70年、世界、とりわけ、アジア・太平洋地域の人々が、日本国家の宰領者がどのような「反省」を行うかに、重大な関心を抱いています。むろん私・たちが、それに向かって厳しい「注文」を着け、厳しく監視しなければならないことは言うまでもありません。しかし、それにとどまらず、私・たちは、戦後初発の「日本国憲法」やいわゆる「東京裁判」に始まり、「脱冷戦」期に入ってからの「首相談話」にいたる日本国家の「反省」のありかたを「反省」しなければならない、と強く思います。

　敗戦70年、私・たち、〈25時行動委員会〉は、「私・たちは、〈列島住民〉を主語とする「反省」のスタイルを創り出すことができるか」という課題に挑戦したい、と思います。それは、「列島住民とは誰か？」を問い明かすことから始まる・・・・・・のかもしれません。・・・・・・どうか一緒に考えてください。

●25時行動委員会：企画・2の実現へ向けて

A. 「首相談話」の性格を考える

B. 「反省」の系譜をたどる

C. あなたのスタイル

D. 「日本国民」を主語とするスタイルの問題性を考える

E. 「列島住民」を主語とするスタイルの可能性を検討する

F. 「朝鮮人はあなたに呼びかけている」（チエ

----------切り取り----------

・ジンソク）へ応答する

G．未生の「列島住民社会憲法」・「前文」への〈前註〉を試みる

●D，E，F，Gへの註

##「列島住民」を主語とするという前に・・・・・私・たちは「日本人」・「日本国民」を主語とする「反省」をどうするかという問題に向き合わなければならない

＋「日本国民／日本人」を主語とすることをパスした「アピール」にまず列島に居住する他の住民が、同時に、世界の、なによりも、アジアの人々が耳をかすだろうか？とりわけ、「歴史修正主義」の強風が吹くなかで。

＋大江健三郎ではないが、「このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という問いを問いつめ問い詰めることの果てに、「国民国家」としての日本の底をやぶること＝「日本の構成的解体」の路につき、「もうひとつ別の日本」の創出へむかう・・・・そのいとなみが見えるものにならないかぎり、アジアの人々の耳にとどくことはない。

＋しかし、「日本という国民国家」の底を破る営みは、私・たちとこの列島に居住する他の住民との共同の営みとして進められるいがいない。・・・・こうして、私・たちは、改めて「日本国民／日本人」を主語とするという出発点へ送り返される。

##「列島住民」からの「アピール」を可能とするためには・・・・・・・

＋「植民地支配と侵略戦争の忘却・隠蔽から、未来を拓く真実究明・謝罪・補償へ」という「反省」の手続きを踏み、さらには「日米同盟をこえて東アジア民衆連帯へ」の路の端緒なりとも拓いておくことが不可欠だろう。しかし、改めて言うまでもなく、これはとりもなおさず「21世紀の安保闘争」の課題にほかならず、とりわけ前者こそ、まさにいま考えるべき「アピール」の内実として明示すべき当のものである。

この矛盾をどうするか？－まさにここに、私・たちが「安倍談話」に対峙して

----------切り取り----------

「列島住民からのアピール」を表明しなければならない所以があり、私・たちが「列島住民ニナル」ことへ挑戦する契機がある。

＋言うまでもなく、上で触れたことは、私・たちが踏むべき手続きの一半であり、もう一半は「血統主義の国民主権」から「居住地主義の列島住民主権」へいたる路を拓くことである。この後者もまた、私・たちのうちで自己完結しうるものではまったくなく、前者の「反省」の手続きを折り返して、この列島の「日本国家」としての構成を解体する手続きに接続することであり、その営みは、列島在住の「日本国民」以外の全ての住民との共同のものとして進められる長期にわたるプロセスである。

＋こうして、「列島住民からのアピール」という発想は、私・たちを大きな課題の前にたたせることになる。未生の「列島住民社会憲法」「前文」へむけての〈前註〉とはまさに、この巨大な課題へむけての、私・たちの「決意表明」であるいがいない。

＋このだんにおよんで、以上のようなことを問題にしなければならないことは、私・たちは言うにおよばず、この列島の社会運動圏じたいの再＝確立という大きな、しかし、死活の問題のありかを指し示している、と言うべきなのだろう。

「私・たちの告知――列島を宰領する国家への」（最終版）への〈註〉

第1の〈註〉――2015年7月31日

3．戦後日本国家が植民地支配・侵略戦争責任をアメリカの「覇権主義」（「パックスアメリカーナ」）の庇護の下でやりすごしてきたことをめぐって私・たちが抱く「恥」の感覚について、私・たちが「恥をかく」ことにとって他者としてのアジアが不可欠であることについて、酒井直樹が鋭く指摘している。――「アジアとの共生の条件として、先ず考えなければならないのは、自らを非日本人あるいは日本人のなかの非国民の眼差しに曝す勇気です。そのためには、自己憐憫の共同体としての「日本国民」の外に出ることが必要になるのです。（中略）日本の外部とは、恥の体験を通じて私たちが出会う、他者の他者性に他ならず、それは空間的に表象出来る外部

とは違ったものなのです。（後略）」「「恥」は私たちがアジアの人々や、日本人の共同体とは無縁の世界の人々に開かれること、恥をかくことによって他者の眼差しに曝されること、そのようにして私たちが、アジアの人々の協力のお陰で変わっていく術の第一歩であるといってよいでしょう。すなわち、私たちは「引きこもり」の隘路から、アジアの人々によって助けて貰えるように、自らを開く勇気を持たなければならないのです。もちろん、私たちが変わって行くことは、同時に他者を変えてゆくことでもあります。」（酒井直樹「帝国の喪失と引きこもりの国民主義」「現代思想」2013・12，同「パックスアメリカーナの終焉とひきこもりの国民主義」「思想」2015・7）

5．先に〈註〉の3でふれた酒井直樹は「恥」の問題について、別のところで次のようにも言っている。

――「歴史的な責任から逃避しようとする者は、（中略）共感の共同体の空想によってしばしば恥の感情を忌避しようとする。（中略）恥を避けるために共同体の空想を求めるのではなく、恥のなかに国民、民族や人種を横断する社会性の可能性を認めるべきなのだ。戦争犯罪のような事項について、犯罪者と私が同胞であることは、私の態度を決定する理由にはならない。もし「日本人」という国民が・・・共感によって（つまり、共犯によって）統合された集団であるのなら、私はそのような日本人である必要はない。（中略）つまり、日本人を割る事だ。私は恥の感覚のなかにおり、私は戦争責任を問う人々の眼差しのなかにいるわけだが、そのような人々の問いかけに答えることは、自らが有罪可能性の立場におかれていることを否認することなく、しかし、責任を問う人々が押しつけてくる日本人という規定に抗議し、日本人の内実を大きく変えて行くことだろう。（中略）日本人の内実を変えて行くためには、日本人を統合するどころか、日本人の即自的な共同性に分裂をもちこむことが必要なはずだ。（後略）」（酒井直樹「日本／映像／米国」青土社2007）

6．「外部でも内部でもない「外部性」を内部に深く穿つ「超克」の実践」（磯前順一・酒井直樹「戦後日本社会と国民国家としての植民地体制」「思想」2015・7―「思想の言葉1」）――「戦後70年首相談話」に抗する「私・たちの告知」がめざしているのは、そのような意味での「実践」である。言いかえれば、「私・たちの告知」は、「戦後70年首相談話」に抗することを、この列島社会の構成原理をどのようにして、どのようなものとして創出するかという問題として立たせること、この列島社会の構成原理を、アジアと向き合い、いかにしてこの日本を底から内破することで創出するかという問題として喚起することを意図している。むろん、私・た

ちはその内実が貧しいあばら骨を露出するものでしかないことを、よく自覚しているつもりである。――その意味で、安倍政治を葬ることで戦後日本国家の構成原理をまさに「超克」し、その〈むこう〉へ行くべきことを説く武藤一羊「何にをもって安倍政権を倒すか、その先に何を展望するのか－戦後レジームの別の越え方」（「PEOPLE'S PLAN」69）は、大きな刺激と大いなる励ましを与えてくれる。

私・たち、〈25時行動委員会〉は、このあと秋を中心に「トークセッション：憲法とは逆に憲法から」を予定しているが、その企画を通して、私・たちは「戦後日本の生み出してきた空想を乗り越えて、冷戦の産物の域を出なかった被害者としての戦争放棄の思想を、世界各地の人々に訴えることのできる普遍的な思想に鍛え直す」（磯前・酒井同上）手がかりを再考したいと、思う。そうすることで、「「戦後」の超克」という問題設定は日本だけではなく、同様に過剰な民族主義に訓育されてきた韓国、傲慢な植民地支配者の態度が習い性になってしまった米国、新たな帝国の宗主国意識に憑依された中国などへ「複数の戦後（＝ポスト戦争）」状況の批判的検討を促すもの」（同上）であることを明らかにし、米中複合覇権からのアジアの解放、「共にあるアジア」へむかう路の道標の一つなりとも手にしたい、と思っている。

やや力んで言うならば、そのようにして、「戦後70年首相談話」への抵抗という「ゲリラ戦」は、安倍政治打倒の〈前線〉の一翼をになうものへと転生するだろうし、転生しなければならない――これが、2015年、敗戦／戦後70年の夏、私・たちの立っている場所である。

第2の〈註〉――2015年8月1日

集会の終わりに、呼びかけ人の人たちによって準備された、安倍首相宛の「共同声明」案に対して、会場は採択の大きな拍手に包まれた。その拍手が止みそうになる頃、二つの世界の境界で挙手をした自分を見ている私がいた。

「私・たちが本当に向き合わなければならないことの大きさに、私・たちの〈共同の作法〉のあり方がつりあっていないのではないか、と思います。この「共同声明」から、〈25時行動委員会・富山〉ははずれます。」――しーんと静まりかえったその一瞬、この時私・たちは、はっきりと一つの世界と決別したのだった。

「この貧しさを生きて行かなむ」――燃える夏の底で、そうくりかえし思い続けていた。

六ページの前半？

第3の〈註〉――2015年8月15日

「戦後70年首相談話」に接して　緊急に

「戦後70年首相談話」に接した。それは、私・たちの想定といささかも変わるものではなかった。

――それは、彼がもっとも得意とする（と、彼・らだけが思っている）「話法」の戦線で、蝶のように、いや蝶ならぬ迷彩色の蛾のように、舞ってみせ、一二〇年余にわたる歴史の舞台を軽やかに跳びはねた。―近代の幕開けの脅威、その脅威の行きついた果ての惨劇にふれて、大向こうの拍手をねらい、世界、とりわけアジア諸国家の宰領者の口にあう最大公約の負の味付けをもって、この国のその後の道行きを装飾し、その過程での悪行についてあちらに跳んでは寛容に感謝し、こちらに跳んでは過不足なく反省し・・・・・―――というように、安倍首相は、この列島を宰領する国家の「戦前」―「敗戦」―「戦後」―現在―未来について、歴代の「首相談話」と彼の推進・強行している「積極的平和主義」の間を可能な限り自由に跳びはねる「ダブルスピーク」＝「安倍話法」の舞を踊ってみせた。その意味で、歴代の「首相談話」のいわゆる「キーワード」は彼にとって恰好の「ダブルシンク」の材料であった。

「戦後70年首相談話」に接した。それは、私・たちの想定といささかも変わるものではなかった。

――すでに「25時行動委委員会通信・2」などでくりかえし触れてきたように、「戦後70年首相談話」に抗する私・たちの基本的なモチーフは、敗戦／戦後70年の過程で表されてきた全ての「反省」のスタイルをいかにして超えるか、どのようなスタイルをこそ創出するべきなのかという〈問い〉だった。なによりもポスト「冷戦」期にこの列島を宰領する国家が案出した苦肉の「首相談話」というスタイルを超えることこそが課題だという念いだった。――「戦争責任」・「戦後責任」・「戦後発生責任」の履行を積年にわたって回避しつづけてきた日本国家が、ポスト「冷戦」の段階でなお継続する「冷戦」状況をぬうようにて挙げられたアジアからの〈声〉を避けられず案出したもの、それこそが「首相談話」だった。それがその後日本国家だけではなく、アジア諸地域を宰領する諸国家にとっての一つの基準になることのうちに、ポスト「冷戦」下の「冷戦」状況のアジアのありようがあったのであり、その基準の根元には不可算のアジアの人々のうちつづく苦難の生と死が累積していた・しているのだ。その意味で、「首相談話」という「反省」のスタイルにおいて、日本国家はまさに「ポスト戦後責任」というべきものを加算してきたのである。

「戦後70年首相談話」に接した。それは、私・たちの想定といささかも変わるものではなかった。

――2015年夏、私・たちは、敗戦／戦後70年にしてようやく70年にわたる日本を生きる私たち自身の負の

累積を「反省」し、戦後日本国家の〈むこう〉へいたるこの列島の未来像を拓くことばの群れ群れがこの列島をおおい、そのざわめきが四方の海をこえてアジア・太平洋の諸地域にとどき、やがてその海が〈ピープル〉が行き交う〈海〉になる・・・・・という〈夢〉をゆめみたのだった。言うならば、それは世界知らずの私・たちの一場の夢想だったのだろう。来るべき「戦後70年談話」へむけて発せられたたくさんのことばの群れ、発せられた「戦後70年首相談話」に関わるたくさんの「マスコミ」言説、「識者の声」の群れは、それらが「首相談話」をめぐって収斂するものであるかぎりにおいて、「安倍話法」＝「ダブルスピーク」の舞台で背丈に応じた舞を踊ったのだ。その舞台に乗ったかぎりにおいて、それらの舞の群れは安倍の衒気あふれる舞を色どる背景でしかなかった。だがしかし、一場の夢であれこの列島の未来への〈夢〉を抱いた私・たちは、列島を宰領する国家へくりかえし「告知」する路を、遠くまで行くのだ。

〈補註ii〉

通信6　囲った部分

----------切り取り----------

〈補註iii〉

日録・国会前　9／17(木)22時～9／19(土)5時

9／17（木）

21時45分　国会前到着

状況把握のため何度かぐるりと国会周辺を歩く。

国会裏側（議員会館側）歩道上には「総がかり行動」中心に約1000人。

労組ふうではなく「市民層」（30代～50代）中心。

「安保法制に反対するママの会」と思われるグループ20数名（子連れ参加）。

「全学連」「解放派」のゼッケンをつけたグループ約30名（60～70代）。

3か所くらいでコールを行う。

国会正面向かって右側歩道上には「シールズ」中心で約2000名。

国会正面向かって左側歩道上にも「市民層」約500名。

主要交差点の歩道はすべて封鎖され、大回りを余儀なくされる。

歩道と車道の間は鉄柵と装甲車で封鎖され、道路への拡大を阻止されている。

各所にスピーカーが配置され、音声が拡散するように配慮されている。

11時30分　シールズが今日の行動を区切る。

「終電がもうすぐです」

（昨日（参議院特別委員会審議の段階）は夜を徹しての抗議行動をしていたよう）

9／18（金）

0時30分　民主主義的社会主義運動（ＭＤＳ）のグループと一緒にいさせてもらう。

正門前左側歩道と公園の間に簡易テント。

60代前後の5～6人のグループで14日から泊まり込んでいるとのこと。

彼らは、経産省前テントの常駐体制にも参加しているとのこと。

2時　参院本会議が休会に入ったとのことで、国会裏側の「総がかり」のコールや行動も休憩に。

正門前右側では、残った「シールズ」のメンバーが散発的にコール。

1人ずつアピールをする。　この行動に加わった各自の思いや、警察の過剰警備（前日に大量逮捕された）への驚きやショック、「捕まった仲間を返せ」など。

その後完全に引き上げる。　経産省テントや議員会館に泊まったとのこと。

朝までは特に動きなし。　警察はひっきりなしに徘徊し、何かと簡易テントに圧力をかけてくる。

----------切り取り----------

8時　機動隊が動き出す。　前日片づけた様々な規制用の機材を設置し始める。

9時　正門両側に人が集まり始める。

ネットやメールなどで呼びかけがあった様子で、横にいた人は「9時に来いと言われたので早朝6時に出発した…」と文句を言っていた。

9時30分　「総がかり」の朝一番の集会開催。

野党議員からの報告と挨拶。

「総がかり」3団体からのアピール。

以後11時、13時、15時と集会が続く。

様々な問責、不信任の提出で「闘っている」との報告、「国会外の声はとてもよく聞こえています」など、国会外の声に励まされていること、「特別委員会の採決は無効だ」などという訴えが中心。

次回の選挙のことも訴えに入る。

演説する福島瑞穂

10時　若者の一群が大挙して登場。40人くらい。「革マル派」であった。

正門左側のやや後方で独自集会とビラまき。

12時　参加者全体で3000人程度。

正門右側の憲政記念館ぞい歩道上には帯状に労組の動員部隊。　各ユニオン、建設労組、教職組がめだつ。　1000人弱程度

ほかにも参加者は、国会正門前右側歩道桜田門駅入り口までの道路に沿ってと、その向かい側歩道上に集まる。　「市民層」では高齢者が多い。

桜田門駅近くで「前進」の購読呼びかけと署名活動を3～4名で。

17時　著名人も発言。鎌田慧、島田雅彦、落合恵子、石田純一など。

集会参加者からの反応は極めて好意的。

参加者は急激に増加し、全体10000人程度で、帯状に歩道に集合。　右側桜田門駅入り口までの道路歩道上には給水所、携帯充電所などあり。　「救急」というワッペンをつけたスタッフが歩いている。　身動きが取りづらい状況に。

17時30分　装甲車が歩道と車道の間に列を作り始める。

若い男性が、抗議のため装甲車によじ登り、警官に押し返される。

参加者の一群が「機動隊は帰れ」のコール。

ところどころで年配者が、機動隊員に抗議。

18時　帰宅する年配者の人もいる。

参加者が続々と集まる。　身動きが全く取れない。

参加者への誘導アナウンスが頻繁に流れる。

「○○が空いているのでそこへ流れてください」

装甲車と歩道の間で、鉄柵で囲ってあったスペー

----------切り取り----------

スが開放される。
（あらかじめ警察と集会主催者で、打ち合わせられていた様子）
国会前正面機動隊のすぐ前にいる人たちからは「（道を）開けろ」のコール。
前に圧力をかけている。
必死で止めるスタッフと弁護士。

警察による規制

「開けろ」のコールを止めるように、スタッフがミニ拡声器で別コールをかける。
先ほどの革マル派も前方へ移動し全体の集合に合流。
20時　参加者がピーク、4万2千人と発表される。
全貌は、身動きが取れないのと、装甲車とで全く分からず。
集会が「総がかり」から「シールズ」に交代するとのこと。
「総がかり」は国会裏側に移動すると案内あり。
これ以後国会正面右側は「シールズ」が、左側も「シールズ」の集会スタッフらしき若者がミニ拡声器でコールする。
国会内状況が全く分からず、携帯で随時確認。

9／19（土）

0時　少しずつ参加者減少
今まで正面左側にいたが、右側に移動する。
コールの合間に、時折野党議員が状況説明に来ると、そのつどミニ集会が行われる
「野党はがんばっています」「声は聞こえています」
「来夏の参院選では賛成議員を落としましょう」など参院選へのアピールもあり。
また参加者からも「次回の選挙で賛成議員を落とせ」「選挙に行こう」「野党がんばれ」などのアピールやコールあり。
2時30分　機動隊の動きがあわただしい。
抗議最前列に機動隊員が並び鉄柵を支える。
抗議参加者は1500人程度。
「参院本会議を通過」の知らせあり。
「強行採決反対！」のコール。
ほどなく野党議員が到着。
民主党の蓮舫氏、福山氏がアピール。
強行採決への怒りと、国会前での活動への謝意をアピールする。
次期参院選への決意なども。
「蓮舫さん、福山さんありがとうー」の声もあり。

行動のピーク

----------切り取り----------

「次期参院選では賛成議員を落とそう、選挙に行こう」というアピールが参加者から。
「デモに行こう、選挙も行こう」のコール。
「野党がんばれ」など
など。
「シールズ」の集まりは、早朝5時まで集会を続け、解散
僕も一番電車に乗るため、片付けに忙しい機動隊を横目に夜明けの国会前を離れる

鉄柵による規制

コールいろいろ

民主主義ってなんだ　これだ
民主主義はどこに　ここに
憲法守れ　　9条こわすな
平和を守れ　　廃案　廃案・・
野党はがんばれ　　・・
やつらをとおすな　　安倍を倒せ　　などなど

行動中感じていた違和感が次第に嫌悪感になってくるのを感じた。
「デモにはいくが、選挙には絶対いかないよ！」というコールができないものかなどいろいろ考えた。

「機動隊員にも今回の法案についてきっと悩んでいる人もいる」と発言した著名人もいた。しかし、大量逮捕を目の前にして、国家の、警察の暴力について、さすがに親和的には感じられない学生もいるのでは？と、真夜中のアピールを聞きながら思った。

なぜあの野党にそんなに期待できるのか？以前のあの民主党政権時のていたらくをどう思っているのだろうか？　沖縄辺野古移設を認め、原発再稼働を認め、国会周辺の声を「大きな音」と言った民主党をなんで応援できるのか？　このくにの政治システム自体に大きなズレを、あるいは違和感を、またノーを、とりわけ「3・11」以降の人びとの運動は感じ、訴えたのではなかったのか？
嫌悪感は尽きない。
しかし、今はこのようにしか言いいようがないのであろうか？　ほかに変革の方法がないから？あるいは見つからないから？「野党」に頼むしかないのだろうか？

・・・などを行動に参加しながら考えた。

その後、富山に帰り、考えた・・・

----------切り取り----------

○

「層」が違うのではないか？

09年に「自由と生存のメーデー」に参加した。今回とは全く違い、そこには自分の居場所があった。とにもかくにも面白かった。数では今回に比べとても少ないが、大事な時間を過ごせたと思う。参加層は重なる部分もあるかもしれないが、「層」の違いがあるのでは？と思った。

○

秩序的であった今回の「国会前行動」

僕が参加した今回の時間の中では、できるだけ主催者の想定範囲を超えないように行動を抑えるよう、最大限「配慮」がなされていたと思う。とりわけ若者の政治的なものへの「嫌悪感」をなくすために、最大限「配慮」がなされているという気がした。その「配慮」が、今回の行動への無批判な全面擁護になっているのではないだろうか。

今回の行動に参加して、自分が感じた嫌悪感は正しかったのだと思う。その嫌悪感は、変革のイメージの乏しさ、貧しさについて感じたことであり、自分の感性はその貧しさに、侵されていないということであったと思う。その感性を私はこれからも信じたいと思う。

--切り取り----------------------------------

プロジェクト「〈ピープル〉の創り方」を始めるにあたって

私はなにを見/視/観ていたか
ー「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面でー

#「代表制民主主義」の機能不全があらわになってすでに久しい。この間の「戦争法案」をめぐる攻防は、事態の一層の進行を告げている。「代表制」と「民主主義」の乖離は、一方に安倍の「クーデター」、他方に「反対運動」の昂揚として現出しており、その間隙は「ナンデモアリ」空間の様相を呈している。問題はその空間にナニが跳び出してくるかであり、私の関心はそこだけにむいていた。私の年来の希求からは、その空隙は「路上群衆評議会」の登場とその「民衆評議会」への転成によって占められるべきだった（「ラウンドテーブル」8・30の「レジュメ」参照）が、そこを埋めたのは、「安保全学連ぬきの60年安保闘争」すなわち「動員なき市民「連」ー「総掛かり行動」連・憲法学者達・○○大学人達・「シールズ」・野党5党・「子どもの未来を心配する」女性たち・「高校生」等々であり、「新左翼」由来の諸グループだった。

　もとより「ナンデモアリ」といっても、そこがなにによって占められるか　は、60年安保闘争から55年のこの列島の社会運動のありようによって、自ずから限定されており、私の年来の希求が空転することはほとんど自明のことだった。

#したがって、「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面で、私の眼は、右眼は上記のような動静に向き、左眼は下記の事・物に向いていた。

　その一つは、埼玉県熊谷市の「6人殺害事件」の「容疑者」とされているペルー人、また一つは、折から読書中の「狗賓童子の島」という小説（＊1）、もう一つはたまたまレンタルした映画「上海バンスキング」（＊2）。

　いまそれらの事・物のひとつひとつについて詳細にふれるゆとりはないけれど、この文脈で必要な最小限のことを言うとすれば、・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・＋そのペルー人の（来歴、この列島での処遇、）この「戦争法案反対」にざわめく列島で途方にくれ路上に迷ったその身体～この身体と向き合うことができるかに日本の社会運動の全重量が問われているのではないか？国会前の「戦争法案反対運動」の渦中で「ここに（ある）」とされる「民主主義」の視野にこの身体は入っているか？＋幕末の「隠岐騒動」、旧来からの「松江藩」の、明治に入っての「新政府」の島支配に叛旗を翻した「島士人」たちとその「自治評議所」による騒乱～この列島の社会運動はこ

----------切り取り----------

の騒乱の系譜を生き継いでいるか?そこで夢見られた「自治」への希求を行き継いでいるか? ＋日中戦争をはさむ動乱渦中の上海で、「ジャズ」を生きたい男・女の「日本人は日本を捨てられるか」という苦悩の果ての生と死~日本の社会運動はこの苦悩を止揚しているかと言わないまでもこの苦悩と苦闘しているか?安倍の「戦後７０年談話」は逆説的にこの苦悩の引き受け方を日本の社会運動に突きつけてはいないか。・・・・・・・・・・・・私の左眼は、それらのことに執着して、離れない。

＃私の眼は、「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面でその右眼・左眼がみた事・物への執着から、なお離れられないままにあるが、その「強行採決」後の風聞からは、「この結着は次の選挙で」・「さあ落選運動だ」・「大違憲訴訟!」「野党の連合を」などの声が聞こえ、きわめつけは「戦争法案廃止の国民連合政府の樹立を!」（＊３）（＊４）。―このたびの「戦争法案反対運動」の昂揚が、人々の希求する「平和主義」・「立憲主義」・「民主主義」への希望・期待・価値付与が安倍によって蹂躙されることへの不安・恐怖・怒りによってもたらされていることは、改めて言うまでもない。しかし、ここではその最終局面に集約的に表出され、今後を左右すると思われる、言われるところの「民主主義の危機」という焦点から―反対運動」の帰趨を見極めることをしている。

そこで思う。・・・・・・・・・・・・・・・さあ見せてくれ、高校生諸君!文科省解禁の政治への関心とやらを! さあやって見せてくれ、憲法学者のみなさん!「解釈」「解釈」、「学理追求・法理探求」の後退につぐ後退の果ての「違憲訴訟」なるものを! さあやって見せてくれ、学者・研究者諸君、〈６８〉以後の荒野をさらにコンクリートで塗り固め、「学内無風」に貢献し、足下の「ユニバーシテイ」の内実が空洞化されていくのを追認してきた諸君がどこまでやるか見せてくれ、どうか臆面もなく言われる―知識人の役割」なるものの「復活」とやらを見せてくれ! さあやって見せてくれ、「シールズ」（志位るず?!）の諸君、ちやほやされ、学者先生にはげまされ、世界で最も遅れて登場したのなら、それに先立つ世界の各地の必死の営みが拓いてきた地平をふまえて、諸君の「闘いはこれからだ」という闘いを見せてくれ! さあやって見せてくれ、「政権交代」、いや、後退につぐ後退、混乱昏迷につぐ混乱昏迷の野党連（除く共産党）の諸君、反（半?）安倍の条件反射をこえて、なにがやれるか見せてくれ! さあさあやって見せてくてれ、真打ちの口前ならぬ腕前を見せてくれ、共産党の諸君!「出かたをみて、出かたにおうじて、いやいや、ここは「国民的統一戦線」ならぬ「総掛かり」で」と隠忍自重、隠忍自重の諸君がついに抜いた「国民連合政府」という伝家の宝刀、いやいや、これは失礼、国民各界各層の盛り上がりに根ざした「戦争法案廃止」という限定

付きでしたネ、それでもいいからやって見せてくれ！「落選運動」でも、「選挙連合」でもやりたい人はやって見せてくれ！「都知事選の失敗をくりかえすな」と思うなら、「ポピュリスト」ならぬ「著名な進歩的知識人」でも担ぎ出してもりたてて、やって見せてくれ！自らの積年の理念にこの間の「盛り上がり」をひきよせたいのであるならば、その画期的なひきよせぶりを見せてくれ、「新左翼」由来のロートルのみなさん！

――これでは、「代議制民主主義は安泰だ！代議制民主主義万歳！万歳！代議制民主主義」ではないか？！#当面は、これらの「代表制」と「民主主義」の乖離に耐えられず、その空隙を埋めようとする者たちの狂奔斉走が続くだろう。私は、５５年も耐えて来たし、これからも耐えられるだろう。しかし、改めて言うまでもなく、その空隙は、私・たちにとってもチャンスなのだ。べつに私は「見者」でありたいわけでも、そうであることを誇りたいわけでもない。

〈註〉

＊1．飯島和一（小学館　２０１５）の大塩平八郎の長男を「狂言回し」としたいわゆる「隠岐騒動」にいたる島民の騒乱譜－この人は、３年おきくらいに大部な歴史小説を書いており、どれを読んでも面白く、「騒乱」の系譜を考える上で、とても大事。これまでのものは、全て「小学館文庫」にある。なお、岡部耕大作の演劇もある。また、松本健一の「隠岐島コミューン伝説」がある。－ＮＨＫの大河「花燃ゆ」も、ちょうど長州藩の「奇兵隊」の挫折を扱っていて、「隠岐騒動」と対比すると、面白い。

＊2．「上海バンスキング」はもともとは斎藤憐の戯曲で、その上演時に大評判になったものだが、１９８４年に深作欣二の手で映画化された。松坂慶子・志穂美悦子・風間杜夫・宇崎竜童。のちにもう一度映画化。～「ドンパチやるよりブンチャカやろう！」

＊3．清義明のブログ「国会議事堂の”敗北主義”―戦後左翼史のなかの市民ナショナリズム」が、とても面白い。他にとても真面目に状況に向き合おうとしている**「世に倦む日々」というブログ**（＊7）も参考になる。そのブログを気にしている「hajimetenoblogid.hatenablog.com」というのもある。一番最近になって見た「取り戻そう！草の根のデモクラシーＮＯ－ＶＯＸJapan　原隆」という「２１．Ｃ　Ｄｅｍｏｃｒａｃｙ　Ｃａｆｅ」の呼びかけもある。この最後のものは、「２つのデモクラシー――ナショナル・デモクラシーとしての代議制、統治者―被統治者の区別をなくす直接民主主義」という捉え

方をしていて、この「ナショナル・デモクラシーとしての代議制」という捉え方と先にあげたブログの「市民ナショナリズム」という規定と重なるところがあり、この重なるところに今回の「戦争法案反対運動」の基調があるのではないかと、私は思っている。ただ不思議なことに、例の「台湾ひまわり革命」には触れていない。

―これまでのところ、それに触れたのは、８月の園良太君、最終局面での平井玄さんtwitter、白石嘉治さん（「図書新聞」2015/09/19）だけ。

＊4．ここでとても乱暴なことだが、「強行採決」後のさまざまな主張を、試みに簡単に整理してみると、以下のようになる。―一端に「**清義明」のもの**があり、もう一端に「**世に倦む日々」の主張**があり、その間に、右には上で触れた今後のとりわけ「参院選」にむけたいろいろな提案・主張があり、その左端に近いところに**共産党の提案**があり、ほぼ左端というべきところに上で触れたＮＯ―ＶＯＸ**の人のもの、園君のもの**がある、ということになる。（「新左翼」由来の諸グループ（＊5）は、その線の左のどこかにある？）・・・・・・そして、その線の外に、私などの〈妄想〉（＊6）があるということだろうか？こんなことをするのも、要は自分なりの運動の水準をとらえる基準を持ちたいという思いからのことだ。―それらの主張の数々を「資料集」としてまとめてみたいものだ・・・・・。

＊5．「新左翼」由来の諸グループと言っても、いろいろあるので一概には言えないが、典型的には、上でふれたＮＯ―ＶＯＸの人のもの、「たたかうあるみさんのブログ」にある４回にわたる「中間総括」のその最終回の「革命的左翼は何をなすべきか？」はまさにそれにあたる。一読することをすすめる。

＊6．以上のようにみてくると、数の上では問題外であるにせよ、私は自分が辿っている路がどんなに細々としたものであるにせよ、間違っているわけではない、とますます確信するばかりだ。

―**〈日本の構成的解体〉へむかう２１世紀の安保闘争を！ それをになう「ピープル創出の構想」を！それを現実に転化する「ピープルが生まれる時」＝騒乱の噴出のための「導火線」を！**

＊7．「世に倦む日々」というブログについては、「強行採決」後の以下の３つがおもしろい。―・「敗北を勝利とスリカエ自己陶酔する「デモ＝民主主義」の倒錯」・「共産党の「国民連合政府」提案―敗北の総括回避」・「ＳＥＡＬＤｓ運動とは何んであったか」　なお、ＳＥＡＬＤｓについては、**辺見庸のブログ「私事片々２０１５年９月15日～」に注目**―これにはたくさんの「批判」（？）が集中したらしい。

----------切り取り----------

●プロジェクト「〈ピープル〉の創り方」を スタートさせるにあたって

#ここで**改めて、「〈ピープル〉の創り方」というプロジェクトをスタートさせることを、提案したい。**

すでに8月末に「ラウンドテーブル」の場を借りて、「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面で、「戦後70年：騒乱譜」の「番外編」として「〈ピープル〉」が生まれる・・・・・????」という試みを行った。また、その後「ワークショップ」という形で、6人の「戦争法案」をめぐる意見をとりあげ論議することも試み、その折りに一番「評判」のよかった柿木伸之さんの著作から、「戦後70年談話」に対抗しようとする「私・たちの告知」のその〈先〉を考えるうえで大事であると思われるもののコピーも配った。したがって、私としては「〈ピープル〉の創り方」というプロジェクトをスタートさせるということの合意をえて、その先を進めるつもりだった。

その後、「戦争法案」の強行採決をめぐる攻防をみきわめようと出かけたメンバーの報告を聞くことも必要になり、私としても「「戦争法案」の最終局面で―「私は何を見/視/観ていたか」をその報告にむけて提起したいと思い、整理したのが上のメモである。

改めて言うまでもなく、いいもわるいもこのたびの「戦争法案反対運動」は60年安保闘争以来の人々の動きがあり、「盛り上がり」があったことは間違いない。したがって、それをめぐる「総括」や「評価」を精査し、今後の方向性をすえることが必要である。私としては可能な限りいろいろな「総括」・「評価」に目を通すことに努めたつもりだが、「〈ピープル〉の創り方」というプロジェクトをスタートさせること自体が、まさに私自身の「総括」・「評価」に他ならない。

人々の動きのリアルな把握にたってその〈先〉をすえることが必要であることは言うまでもないが、この間の**「デモクラシー」の歴史的水準（「リベラルデモクラシー」！その現実態としてのナショナル・デモクラシー！さらにその内実にそくして言えば「国民国家によって植民地化された民主主義」（葛西弘隆）**を前提にしたとまでは言わないまでも、その問いかえしがきわめて不十分な「民主主義」拝跪（はいき）には唖然とさせられる以外ない。―これでは60年安保闘争の時点における丸山真男まで「先祖がえり」していることになる。それからの55年の時間、その間のこの列島上の社会・政治運動の蓄積・系譜を無いかのようにみなす、さらにはこの間のギリシャ―エジプト―アメリカ・ウオール街―台湾「太陽花革命」―香港「雨傘革命」という先行する苦闘の〈後〉の目的意識的な継受をふまえないこのたびの「戦争法案反対運動」をめぐる全ての論議はなんなのだ。この点について、独

自の運動展開を提起しなかった「新左翼」由来の人々の無残さ、その「総掛かり」運動への便乗とは言わないまでも寄りかかりは目もあてられないものだ。「民衆の盛り上がりに依拠する」ということの無原則ぶりをみよ！

以上、「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面のありように引きつけて、この間の「反対運動」について批判的に触れてきたが、問題が以上の点につきるわけではないことは言うまでもない。一方に、「戦争法案」を軸とする安倍の「戦後レジームからの脱却」策動による戦後日本国家の根底からの改変をめぐる攻防はいかなる地平のものであらざるをえないか、その改変に私たちが対置すべきものは何であるのかという問題、その一つの側面を構成すべき「21世紀の安保闘争」という問題―武藤一羊さんの以前からの提起にまさに今対応しないでどうするのかという問題－があり、他方に、すでに上で簡単に触れはしたが、このたびの「反対運動」の主要な起動力・推進力となってきた「民主主義」イデオロギーの根本からの再構成という問題があり、改めて言うまでもなく、その問題に向き合うことなしに、私たちはこの列島の未来をひきよせることは出来ない。私・たちは、このたびの「戦争法案反対運動」に対する私・たちの総括・評価に他ならない「〈ピープル〉の創り方」というプロジェクトで、この一個二重の問題にとりくむことを予定している。―そのプログラムについては、以下参照。

●補遺

以上の提起を記してからすでに2週間余りの時間が過ぎている。その間に「戦争法案反対運動」の〈その後〉をめぐる論議が進行している。それらの論議を正確にフォローすることは、私にとって必ずしも必要なことではないが、その帰趨を視野に入れておくことはどうでもいいことではない。そのかぎりで見る限り、共産党の提起を契機に「政権構想」なるものをめぐる論議が行き交っているようだ。なかにはすでに上で触れたブログで早くからその問題を提起しているひとびともいるが、野党間のやりとりとはべつに、真摯な論議もある。予期していたとはいえ、シールズをめぐる応酬のミニクサとは別に、その「政権構想」をめぐるやりとりも、その真摯さを疑ってはいないが、私には遠い世界のこととしてしか見えない、というよりはその論議をしている人々の「安倍打倒」のレベルが私にはとても遠いという以上のものではなく、むしろそうした論議が成り立ってしまうこの列島の社会運動圏への愛想づかしが深まるばかりだ。

改めて言えば、「戦争法案反対運動」の〈その後〉は、ここから「21世紀の安保闘争」へいたる路をいかに拓くか、「安倍打倒」を、戦後日本国家の変革を、それを構成してきた原理間の対決を通してかちとるべ

きものとして、据えきることができるかということ以外に、私の関心はない。それは私という一個人のことというより、すくなくとも60年安保闘争とその後を経験してきた者の共同の課題である。以上でふれたこのたびの「戦争法案反対運動」をめぐる論及も、この課題に照らしてのことである。―言わずもがなのことだが、この間よく見うけられた「戦争法案反対」と辺野古の闘いへの支援を併記できる運動感覚は、私には理解不能なことだ。いわんや、このたびの闘いを「安保闘争」などと言うことは理解不能でらち外のことだ。

なお、すでに「通信」6の末尾でふれたが、栗原康×マニュエル・ヤンの対談（「図書新聞」2015・9・28）はこの間の「戦争法案反対運動」をめぐる言説のなかで唯一つ共鳴できるものだ。―「国会に人っ子ひとり入れさせないぞ」くらいの発想からはじめたほうが、いろいろやりようがあっておもしろいんじゃないか」・「議会（制民主主義）にいかに圧力をかけるか」という尺度ではなく、議会という前提をとっぱらうところからはじめてみてもいいですよね。」―更に付け加えるなら、上でたびたびふれた「世に倦む日々」がどんどん面白くなっている。正直に言うと「強行採決」の後が面白い。面白いなどと気楽に言うなということなのだろうが、いまのところスタンスの違いはいかんともしがたいが、今後その違いが変容していく可能性はないわけではないだろう。ぜひフォローしてみて欲しい。

〈補註ⅳ〉

???

〈補註ⅴ〉

「慰安婦問題『最終』解決に合意」で、日韓が未だに脱植民地化されていないことが露呈――この「問題」を脱植民地化回避システムの廃棄へと折り返せ！

こちら〈25時行動委員会〉　応答ねがいます
応答ねがいます！

身体が怒りと恥ずかしさで震えています。
日本列島に生きる私・たちの祖父たちが、アジアの人々に対して犯した「とりかえしのつかない」悪行を、私・たちはどのように「とりかえす」のか ――この〈問い〉に基づいてこの列島の再＝構成を試みる私・

たちの営みが、なお未成であり続ける今、「安保＝戦争法制の整備」にひた走る安倍政権によって、その〈問い〉が無化されることに、怒りと恥ずかしさで身体が震えます。

とどけよう、私・たちの〈声〉を、くりかえし、くりかえし、アジアのひとびとに。私・たちの怒りの声を、恥辱にまみれたこの身体の底からの声を！

2015年12月28日の日韓政府発表に対する〈25時行動委員会〉の見解

〈要点〉

● **戦争法案成立の延長線上に**今回の和解の政治的演出がある。あの「70年談話」を見過ごし、戦争法案を通させた結果が、この日韓の和解である。「談話」→戦争法案→和解は、「世界の中心で輝くニッポン」を目指す安倍の既定路線である。

● **「子や孫に」云々というのは**、「談話」でも使った安倍お気に入りのフレーズである。「談話」と和解は、「もうこの件はこれで終わりだぞ」という韓国への脅し文句であり、「上から目線でそう言ってやりましたよ」という国内極右向けの言いわけである。

● **安倍の本音は**、米国への自発的隷従から早く脱したい。「片務的」であった日米安保を日本も米国を守るという形式的な対等関係に変えた。その勢いで韓国との間に横たわる厄介ごとにはサッサとケリを付けたいのだ。その先は、改憲あるのみ。そうして、アメリカの覇権主義に合わせつつもアメリカに頼りにされ、独自の判断でも戦争ができる帝国が完成する。さらに今年は、伊勢志摩サミットが控える。国家神道の聖地で世界の首脳を迎え、その中心で記念写真に納まる。つまり、「世界の中心で輝くニッポン」ってなもんだ・・・安倍の妄想は着々と実現に向かっている。ダブルスピークというインチキ話芸を武器にして。

● **安倍のダブルスピークにもウィーク・ポイント**はある。たとえ外交ゲームに勝ったとしても、自分の言動によって、植民地主義の負の歴史が呼び起こされ、日本帝国主義の（安倍にとって）輝かしい歴史が否定される「危険性」はある。

● **歴史認識で闘うために**、私・たちは自らの国民主義的歴史観を東アジアの普遍主義的歴史観とすり合わせて書き換えなければならない。その上で、「国益」という発想を捨てた非国民＝〈ピープル〉として、東アジアの〈ピープル〉と連帯し、日本に括り作られた脱植民地化回避システムを破壊するのだ。

Ⅰ **「最終的かつ不可逆的な解決」＝「蒸し返さない」**

Ⅱ **「金はやる、黙って死んでゆけ」**

----------切り取り----------

1、「日本政府は韓国政府に金を渡す。だからこれ以上蒸し返すな。(政府筋)」とする態度は、その金が被害者たちへの「口止め料」であることを露骨に示している。この「口止め」という行為は、被害当事者たちの政治的抹殺である。

さらに、「少女像」を撤去することを支払いの条件とするということは、「お前ら目の前からうせろ。さもなくば、びた一文出さん」という恥ずべき傲慢さである。しかも、言い放った後始末を韓国政府にやらせるというのだ。

2、それだけではない。「金を渡すから、これからは国際社会で非難するな」「蒸し返すな」という脅し文句は、私・たちの活動をも、「すでに解決済み」として、韓国からの抗議の声と共に封じ込めてしまうためのものだ。日本政府お得意の脱植民地化回避の手口である。ソウハ、イクモノカ!

Ⅱ 「子や孫に謝罪し続ける宿命を背負わせるわけにはいかない」＝皇軍との共犯行為

1、「宿命を背負わせ」たのは、かつて皇軍であった祖父たちの行為である。しかし、70年後の安倍の共犯的振る舞いで、「宿命」はこれから先も永遠に続くことになった。

2、では、真に「最終的かつ不可逆的な解決」を見て、背負った宿命を下ろせるときは来るのか? ――来るとしたら、それは戦後日本国家に括りつけられた脱植民地化回避のシステムを、列島に住まう者たちが、内側から破壊したときである。

しかし、安倍の言動を恥ずかしいと感じる「国民」は、今ほとんどいない。安倍の言動は大日本帝国から続く「国益」を守ったという理屈だ。そして、「国民」は「国益」を守ったのだから、それでいいと思っている ――これでは脱植民地化など到底あり得ない。日本国民は未だに植民地宗主国たる帝国国民意識を脱していない。それが敗戦後70年、何もしなかった戦後日本国家の暗澹たる現実だ。

安倍は脱植民地化回避のシステムを起動させながら、それを巧妙に見せないようにしてる。というより、国民はそれを見ないようにして、「ニッポンすごい」「ニッポンジン偉い」と、(外から中は見えるのに中から外が見えず、自分たちの姿しか映らない)ハーフミラー・ドームの中で、はしゃぎ続けている。

Ⅲ 議論を終わらせるための「おわび」を反転させて、歴史認識で争う

1、「日本政府の振る舞いを、当事者側がどう受け止めるだろうか/日本政府にもっと誠意ある謝罪をさせるにはどうすべきか」――こう考えている以上、

この問題を切り裂く刃は、決して自分自身に向かうことはない。敗戦後70年、「日本国民」はこのような態度でいることで、何を失ってきたのか ――それは、他者（＝アジア）からのまなざしであり、それに対する羞恥心ではないか。私・たちは、国益を最優先し、他者のまなざしで自分・たちの姿を照らすことのできない「日本国民」であり続けるかぎり、皇軍の末裔からは抜け出せない。

2、脱植民地化回避のシステムをどこからぶち壊すか

――辺野古かフクシマか改憲阻止行動か・・・それは分からない。しかし、これだけは言える。国民主義に立った明治近代からの歴史認識 ――これを根底から改めない限り、絶対に「システム」を破壊できない。国民的アイデンティティを構築する上で欠かせない国民主義に基づく歴史意識を否定し、植民地支配の負の歴史を直視することによって、人々が「国民意識」に支配される歴史観を拒否するところへ到達しない限り、どこを狙っても、「システム」を破壊するまでには至らない。70年続く戦後日本国家の在り方を根底から変えることにはならない。「国民なめるな」（戦争法案反対国会前行動でのコール）では、戦争法制は止められなかったのだから。

3、安倍首相の「おわび」を起点に「日本国民」に折り返す ――おわびすることで「『慰安婦問題』が最終的、不可逆的に解決したことに合意した」のならば、わびる点があったことを日本政府は国際公約として「最終的、不可逆的に」認めたことになる。安倍は、この認識を後退させることはもうできないのだ。安倍の狙いはこの問題についての議論を封じ込めることにあるのだろうが、そうはいかない。法的な謝罪であるかどうかや賠償責任があるかどうかは大事なポイントだが、この際わきに置いてでも、これは、帝国の歴史上大きな負を自ら認めたことになる。

明治初期から日本の支配層が近代化の遅れを取り戻さんとして取り入れた帝国主義、アジアの植民地化と侵略戦争 ――この帝国がたどった道に誤りがあったことが、今安倍政権の下ではっきり確定した。輝かしい帝国の歴史上の、たった一つの汚点であるというかもしれないが、その一つが、植民地主義そのものの残虐性を白日の下に晒し、帝国日本を明確に否定する起点になり得る。安倍政権と歴史認識で争う際の国際的なアドバンテージになる。

この皇軍の蛮行を、地球上のあらゆる植民地主義的暴力関係の折り重なった歴史上に位置付ける。そうすることで、この組織的性奴隷制が、15世紀の大西洋を渡る奴隷貿易の始まりから現在までの世界中の植民地主義的暴力の連鎖の上にあり、世界の帝国主義の中でも最も後発の日本帝国が、後発である

がゆえに、植民地主義が必然的に招き寄せる凶暴性を無限定に解き放った蛮行であったことが浮き彫りになるだろう。

ところで、15世紀にまでさかのぼって奴隷制や植民地主義を国家による犯罪であると断罪した国連の会議がある ――2001年9月8日に南アフリカのダーバンで開催された、「反人種主義・差別撤廃のための世界大会」＝通称ダーバン会議である。ここで採択されたダーバン宣言では、西欧諸国がこれまで行ってきた植民地時代の「奴隷制」は、「人道に対する罪」、すなわちナチスのホロコーストにも比肩される重大な人権侵害であると、初めて真正面から提起がなされた。しかし、国連では植民地主義の来歴をもつ欧米諸国が未だ支配的な力をもっており、ダーバン宣言の実践化は未だ道半ばである。

そうではあるが、この世界大の帝国主義と比較すれば後発の「地域帝国主義」ともいえる日本帝国主義の性奴隷制度を問う流れを、かつての欧米帝国の植民地主義責任を問う、緩やかだが長大な潮流と合流させられるならば、「なぜ欧米諸国には植民地支配が許されて、日本だけ謝罪しなければならないのか」という安倍流の言い逃れは、この先通用しなくなる。

日本と韓国は、北朝鮮封じ込めに躍起になり中国の覇権主義にも対抗する米国から、軍事的にさらに一体化するように厳命されており、「慰安婦問題」という懸案の「処理」を命じられた。しかし、上述した15世紀からの構図を描くことで、被害当事者の頭越しに手打ちを行った日韓両政府と、それを覇権主義的に促した米国政府 ――犯罪的なこれらの政府の振る舞いをすべて串刺しにする視点をもてる。

さらに、私・たちは、脱植民地化を回避する日本国家と、それを迫ることに不徹底な自分自身の脱植民地化をも串刺しにする視点を、もたねばならない。敗戦後の日本国家から恩恵を受けてきた自分自身にも、不徹底な面が多々ある。あるからこそ、安倍政権のような、アジアの民衆に顔向けできない恥ずかしい政権を支える恥ずかしい体制がこの列島を支配しているのだ。

この現状が、自分自身の不徹底さから生起していることを、苦い思いと共に自覚しながら、これからも声をあげていく ――声をあげよう。あげた声は必ず自分自身に戻り突き刺さるけれど。それでも声をあげよう。それだけが武器なのだから。どこでも、何度でも。

（なお、以上は生・労働・運動ネットのメンバーによる論議をまとめたものである。）

----------切り取り----------

〈註〉

1. 「季刊ピープルズ・プラン」NO・69（二〇一五年七月）に掲載したものであるが、『生・労働・運動ネット　ZINE・5』に収録するにあたって、本文の末尾をその後の試みに応じて修正し、（註）の部分を補正し、また、（註）を補う［補註］を加えた。
2. 〈地域を拓くシンポジウム〉については、以下参照――花崎皋平「地域を拓く　生きる場の構築」（一九八五・農文協）・同「風の吹き分ける道を歩いて」（二〇〇八・七つ森書館）
3. 「地域住民運動」を含む日本における〈68〉年については、以下参照――武藤一羊「社会運動と分水嶺としての一九六八年」、（フォーラム90s研究委員会「20世紀の政治思想と社会運動」一九九八・社会評論社所収）
4. 武藤一羊「社会運動と分水嶺としての一九六八年」、白川真澄「地域住民運動」、埴野佳子「私の肉体に私・たちの身体を」（中島真一郎編「原発やめて、ええじゃないか」一九八八・ホープ印刷出版部）参照
5. 能登原発反対運動については、「戦後日本住民運動資料集成・7」（すいれん舎・二〇一一）参照
6. 小倉利丸「支配の〝経済学〟」（れんが書房新社・一九八五）
7. 日本カーバイド工業労働組合編「酒は飲んでも解雇はのまぬ」（一九八一・三一書房）参照。また、同上労組をふくむ「少数派労度運動」については「少数派労働運動の軌跡」編集委員会編（二〇〇七・金羊社）参照。
8. 一九九一年に、「学校労働者組合コム・ユニオン富山」として結成。
9. 「遊撃のはじまりへ」そのⅡ「遊学塾通信・NO・2」（一九八三・二）
10. 東京／沖縄／九州／北海道と連結する「気流の場」
11. 「ピープルズ・プラン21世紀行事」は、一九九八年北海道からはじまり九州まで展開されたが、可能なかぎりそのすべてに参加した。なお、同「行事」に関わる「アーカイブ」は、ピープルズ・プラン研究所にある。
12. 例えば、山形県の「置賜百姓交流会」のメンバーの営みへの「農業研修」
13. 私・たちの「反原発・列島右往左往行」については、「生・労働・運動ネット　ZINE・2〈フクシマ〉へ折り返すことに向けて」（二〇一四秋）参照
14. 「沖縄セミナー・二〇一一」については、「生・労働・運動ネットパンフ　〝沖縄〈と〉私・たち――〈群島的接続〉のはるか手前で〟」（二〇一二）参照。
15. 私・たちの「アジアと向き合うありようは、一九九一年、県内の一大企業を相手取ったアジア・太平洋戦争の間に「女子挺身隊」として「強制連行」された韓国人女性による「未払い賃金」などを請求する訴訟を支援する「不二越強制連行訴訟を支

援する会」の結成への参画を通じて、大きな試練にさらされ、自らのありようを再＝審することになった。――なお、同訴訟については、古庄正編著「強制連行の企業責任」（一九九三年・創史社）、山田昭次・田中宏編著「隣国からの告発」――今日例連行の企業責任２」（一九九六・創史社）参照。

16. その間の私・たちの試みについては、「拒否の〈前〉線情報」ＮＯ・１（二〇一三・七）～ＮＯ・５（二〇一四・十）参照。

17. とりあえず以下参照。米谷匡史「アジア／日本」（岩波「思考のフロン ティア」二〇〇六）また、川田洋「〝東亜革命〟――敗北と遺産」（「現代の眼」一九七三・九）、「国境・国家・大東亜革命」（「共産主義運動年誌」14号二〇一三・十）など参照

18. 二〇〇八・五「来るべき自己決定権のために――沖縄・憲法・アジア」、二〇一三・四「サンフランシスコ条約60＋1年東京シンポ」、二〇一四・四「東アジアの沖縄／日本――サンフランシスコ・システムを超えて」、二〇一四・七「いま、なぜ琉球共和社会憲法か」、二〇一五・四「敗戦七十年の日本と沖縄／アジア」と続く一連の「シンポ」。

19. そうした構想深める上で、以下のものから学ぶものが多い。オルタナティブ提言の会「根本から変えよう！」（二〇一一・樹花舎）

20. 例えば、川満信一・・仲里効編「琉球共和社会憲法の潜勢力」（未来社・二〇一四）参照。

21. 「25時行動委員会・富山　通信１」（二〇一六・六）参照

22.